



# 学校だより

10月号  
横浜市立桜台小学校  
令和3年9月30日発行

## 自動車のラジオから

教務主任 白川 浩司

9月中は分散登校へのご理解ご協力をいただき、誠にありがとうございました。緊急事態宣言が解除され、10月4日からは通常登校に戻ります。引き続き感染症拡大防止対策を徹底しながら、教育活動を進めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

私は教師という仕事をしています。桜台小の子どもたちの前では「先生」と呼ばれていますが、家に帰ると「親」になります。先日、自動車に乗ってラジオを聴いていたら「子どもは、親が願うようには、なかなか育つものではない。子どもは、親を見て親のように育つものだ。」という言葉が耳に入りました。以前にも同じような言葉を聞いたことがありましたが、忘れていたことを思い出した時のように、「そうそう！」という気持ちになりました。

この言葉は「親が、うちの子はこんな大人になってほしいと願い、『ああしなさい、こうしなさい』といくら言っても、なかなか思い通りには育ってくれません。それよりも、子どもは親のあなたの振る舞いや行動を見て育つのですよ。」ということの意味しているのです。「親」という単語を「教師」に代えてみると、やはり「同じことが言えるなあ。」と感じます。

何年も前のことになります。受け持ちのクラスの児童の中に、接し方に配慮すべき児童がいて、自分なりに接し方を工夫していました。周りの児童たちにもその児童と接するときには同じように少し気をつけてほしいと思いましたが、そのことを児童たちに伝えるのはなかなか難しかったのです。なので、「とにかく自分だけでも」と実践をしていたところ、私の接し方を見ていた子どもたちは、細かく説明されたわけではないのに、むしろ私よりも上手に接することができるようになっていくことに気づきました。それ以来、「見られている」ことを意識し、肝に銘じておきたいと思うようになりました。しかし、年月が過ぎたり、または忙しくなって気持ちに余裕がなくなったりすると、そのことをいついっしょに忘れてしまうことがあります。私にとって、ちょうどよいタイミングの「自動車のラジオ」だったので、「いつでも意識をしている」ことの難しさと大切さを思い出させてくれました。

この言葉のほかにも私が子どもたちと接するときに「いつも意識していたいこと」を表した詩があります。ドロシー・ロー・ノルトというアメリカの作家の「子ども」という詩です。自分も「いつも意識」をしておけるように、ここに載せさせていただきます。



「子ども」 ドロシー・ロー・ノルト（川上邦夫訳）

批判ばかりされた子どもは 非難することをおぼえる  
殴られて大きくなった子どもは 力にたよることをおぼえる  
笑いものにされた子どもは ものを言わずにいることをおぼえる  
皮肉にさらされた子どもは 鈍い良心のもちぬしとなる  
しかし、激励を受けた子どもは 自信をおぼえる  
寛容にであった子どもは 忍耐をおぼえる  
賞賛を受けた子どもは 評価することをおぼえる  
フェアプレーを経験した子どもは 公正をおぼえる  
友情を知る子どもは 親切をおぼえる  
安心を経験した子どもは 信頼をおぼえる  
可愛がられ抱きしめられた子どもは  
世界中の愛情を 感じ取ることをおぼえる